

設立 平成24年 5月15日
開塾 平成24年 9月 8日
発行 令和 3年12月11日
(103号)



[事務局] 〒648-0094
橋本市三石台4-1-15
TEL 0736-38-3669
FAX 0736-38-3680
発行 學塾・中之島事務局

人間学講座
第108講

「今日一日を
喜んで生きる」

寺岡賢先生



こと、同じ大学出身で寺田先生から「寺・寺コンビ」と言ってもらったことなど、我々、寺田先生を敬愛する人間学塾・中之島メンバーの心を引きつけ、気持ちが一体となる中でスタート。「寺岡語録」が満載のご講義でした。

A portrait of Terada Kenji, a middle-aged man with dark hair, wearing a white button-down shirt. He is smiling slightly and looking towards the camera. A small white tag with the name '寺岡' (Terada) is pinned to his shirt. The background is a plain, light-colored wall.

寺岡先生のご講義は、「身内感」満載の受講生との対話に始まり、今年三月にお亡くなりになられた寺田一清先生の思い出・・・金沢で一緒に講演された時の

■ 自分さておき人様に己忘れて精魂尽くす

人は母から生まれ、母は祖母から生まれ……これをずつと辿つて行つた先を「素（そ）」というが、ここから降りてくるものを感じるのが「瞑想」呼びかけていくことが「祈り」である。この辿つて行つた先からの繋がりは広がつて、結局、人はみな繋がっているのである。皆が繋がっているから「自他不二」であり、「世直しは余直しである」と言える。世の中が悪いと言う前に、まず自分身はどうか、と問いかけることが大切ではないでしょうか。

人だけでなく、命あるもの全て繋がっている。

二宮尊徳も石田梅岩も、皆「自然に立ち返れ」

「自然から学べ」と言つた。つまり、自然の在り方と人間の在り方は同じではないか。そうすると、表れてくる事象はいろいろでも、その元には根つこがあつて命があつて、繋がっている。世の中の聖人君子と言われる人が言っていることは皆同じ。それは目に見えない存在を尊んでいく、ということ。利他の精神、共感、日本人が皆大切にしてきたこと。

「心あわせて寄り添い生きる」

■ 今日一日をよろこんで生きていこう

どんなに能力があつても、それだけで成功したという人はあまりいない。成功している人は、運のいい人であつて、運のいい人は、神様に愛される生き方をしてゐる。この世に偶然はない、全て必然である。誰も病氣になつたり事故にあつたりはしたくはないが、事故や病氣で気づかされることがある。起こつたことは変えられないが、変えられないからこそ、起きたことは全て良いこと、意味があつたと受け止めていくしかない。だから喜んで生きるということは、喜べることを喜ぶのではなく、苦しいこと、つらいことを頂いていこう、ということ。苦しいことほど有難いのです。

「苦を喜ぼう」

「苦を頂いていこう」

「苦は神が我々に与えた最大の恵みである」

■ すべてを感謝し、常に喜び、絶えず祈る

永六輔さんは「生きているという事は誰かのお世話になっていくこと。生きていくという事はそれをお返ししていくこと。」と言われたが、ではどうやってお返ししていくのか。ひとつは、起きていることは全て与えられたものだから、それに対して感謝し、喜んで生きること。そして、我々が最後にできることは祈ること。

「功なり名遂ぐるも、その靈は満たされず

り身健やかなるも、その魂は癒されず。全世界を得るも、生命を失わば、何の益かあらん。」

■ 知ることの深さは愛することへの道

丸亀少女の家などを作られた三原スエ先生のご実家のお寺が孤児院をしていたが、お腹をすかせた子供達が近所の畑から作物を取ってきて警察に突き出されることがあった。しかし、孤児院で預かっている子供と知っている警察の方が黙って送り届けてくれたことに對し、子供たちの状況を知っていたら裁く気にはなれないでしょう、と先生のお父様が「知ることの深さは愛することへの道」言われた。

今、いろんなことが起こっているが、その後ろで、そうせざるを得なかったいろいろな人の想いがあることが多い。だから、起こっていることの良し悪しだけを見るのではなく、その後ろへと想いを馳せることが、我々の人としての深みを作り、根を肥やしていくのではないか。

■ 後ろからの教育

ノールダム清心女子大学の学長をされていた渡辺和子先生は、教育についてこう言われている。前からの教育は「これが大事だよ。こうするんだよ」ということ。横からの教育は、履物を揃える、あいさつをする等、自分の姿を通して伝えていくこと。一方、後ろからの教育というのは、普段は見ることもない、目にするものできないものである。場合によっては、生きている間は分からないものかも知れない。だけど、それがもし分かった時には、オセロゲームの黒が一気に白に変わっていく位の衝撃をもって伝わっていくものである。目に見えない世界との対話をしている姿こそが後ろからの教育である。

「知覧特攻平和会館」の板津忠正さん

板津さんは若い頃、民間のパイロットを目指しておられましたが、陸軍飛行学校を経て特攻隊員となり出撃します。ところがエンジントラブルで徳之島に不時着。そして終戦。「生まれた時は違っても共に死のう」と約束した仲間が死んでしまった中、なぜ自分だけが生き延びてしまったのか？と悔やむ日々が続いたそうですが、名古屋市役所に勤めながら、特攻隊員の仲間への慰霊を続けられました。そのような中、知覧で軍指定の食堂を営み、特攻隊員の母と言われた鳥濱トメさんに再会、「あなたが生かされたのは何か意味があつて生かされたんだよ」という言葉によって人生を変える。そして、特攻隊員の遺品を集め、知覧に持つていき、これが「知覧特攻平和会館」へとつながる。その後も、遺影を探して全国行脚をされ、平成7年、とうとう1036名全員の遺影が揃ったのです。

(抄録 野依佐千子)

《感動語録集》

◆寺岡 賢先生

「今日一日を喜んで生きる」

*偶然の偶然は必然

*世直しは、余直し（自他不二）

*すべてに感謝し、常に喜び、絶えず祈る

*知ることの深さは、愛することへの道

*自分さておき、人様に、己忘れて精魂つくす

*心あわせてよりそい生きる

*今日一日喜んで生きる

*苦を喜ぼう 苦を頂こう

*苦は我々に与えられた最大の恵み

*運が良い人は、神様に愛される生き方をする

*喜んで生きる喜びには、苦の喜びがある

*祈って信じて待つのが教育（時間をかける大切さ）

*生きるといふことは、誰かのお世話になっていること

こと

*生きていくということは誰かにお返しをすること



《宿泊研修参加感想集》

岡本 尚

日本で一番大きな太鼓の音で心振るわされて始まった伊勢合宿。実用と省略の美を所作から学び、講師の方々からの「すべてに感謝し常に喜び絶えず祈る」「花のほほえみ、根

の祈り」「世直しは余直し」「自他一如」をはじめする言葉を心に刻み、想いを交わしあ

ったグループ討議と懇親会、感謝の念で命をいただいた食事、流汗鍛錬と気合を入れて臨んだ五十鈴川の水行、古くて新しき伊勢神宮への参拝とすべてに共振した二日間でした。

伊勢は心のふるさとと呼ばれていますが、人間学塾もまた私たち塾生の故郷だと感じております。ありがとうございました。

上田真弓

私は今年の9月から《人間学塾・中之島》に入塾させていただき、この度初めて秋季宿泊研修に参加させていただきました。

この二日間で、先生方の講話『今日一日を喜んで生きる』『今をいきいき』を拝聴させていただき、五十鈴川での禊（水行）、静座行、神宮特別参拝（内宮御垣内）と充実した感動の時間を過ごさせていただきました。

私は、今まで日本の歴史や《ヤマト心・ヤマト言葉》を学ぶ機会もなく、興味を持つこともありませんでした。しかし、今回このよう機会をいただき、日本の素晴らしさを学ばせていただき、日本に、日本人として生まれてきたことに感謝と感動が溢れました。

先生方のお話は心に深く深く響き、笑いあり、胸を締め付けられ、涙する話もあり今、私達があるのは

先人の方々のお陰であることを知り、感謝の気持ちが湧き出てきました。

言葉では、表現できないほどの思いです。

今回の研修で学んだ大切なことは、次世代を担う子ども達に繋げていかなければいけないことだと強く感じました。

その前に私自身が人間学塾・中之島でしっかり学ばせていただきたいと思います。

たくさんの方の気付き、たくさんの方の感動と感謝の詰まった幸せな二日間をありがとうございました。

（Zoom参加）小南昭雄

伊勢合宿のハイライトの一つは禊。

4年前の3月禊をしたがあまりの水の冷たさに古希を迎えた今、禊をする自信がなくリモートで参加することにしました。

穢れの多い私には、禊は必要だと重々分かっているが（笑）。

リモートではあったがグループ討議にも参加、思っていた程違和感がなく、顔も見え声もよく聞こえ臨場感があり楽しかった。

やはり学びを深めるグループ討議は大事だと改めて感じた。

小寺啓之

伊勢の研修はいつ行ってもふる里に帰ったような気がする。来年も開催されたら参加します。修養団の講師の先生方の話しに、引き込まれました。

人間学塾は、長く続くことを願っています。できる限り続けて参加します。

人間学講座
第109講

「今をいきいき」

武田毅宏先生



■気づく大切さ

この修養団では夏の子供たちのキャンプをすることもありま。一五〇人ぐらいの子供たちがやってきて、廊下には履物が並びます。上級生が履物をきれいに並び替えます。そこで子供

たちに質問をします。「履物を揃えることは良いことですか？悪いことですか？」ほとんどの子供たちは手を挙げて「良いことです」と答えます。「そうかな？もっと考えてみよう。履物を揃えることは良いことですか、悪いことですか、当たり前ですか？」と投げかけると高学年の子供は気づき始めます。まだ気づかない低学年の子たちに「履物を揃えるのが良いことだったら、乱れている状態が当たり前になってしまうと困るよね」。そんなやりとりの中で、子供たちは乱れている履物をそっと揃えていくことに気づいていく。その「気づき」が大事です。そうして気づいた新たな良いことが、習慣となり癖になっていくまではおよそ三月。「みつき」続けられ「身に付く」、そうして続けられ自分の中に残っていくでしょう。

■かみさまのおやくそく

「神様とのお約束／大昔に、私たちの祖先が日本という国を創ったとき、心のきれいな人たちが住む、立派な国にしようと思いました。／そしてみんなが、その気持ちを大切にして、心を一つにして頑張ったから、今の日本があるのです。／それはとても誇らしいことです。／皆さんはお父さん、お母さんを大切に、兄弟姉妹は助けあいましよう。お父さんお母さんは仲良くしましよう。／友達は大切にして、意地悪をしたり、嘘を言ったりはいけません。／威張ったり傲慢したりせずに、困っている人がいたら、助けてあげましよう。／勉強は怠けずに、いろいろなことを覚えたり、

考えたりして、賢くなりましよう。／人のことをうらやましがつたり、ひがんだりせずに、すすんでみんなのためになることをしましよう。ずるをしたりせずに、きまりはきちんと守りましよう。／もし大変なことが起こったら、勇気を出してみんなのために頑張るましよう。／このお約束は昔から、みんなが大事にしてきた。／みんなが大きくなくても、外国に行っても変わらない本当に大事なことで、皆さんもこのお約束を守って、立派な人になってください。」（原文は全文ひらがな）

この文章は赤塚高仁さんが作ったもので、原本は「教育勅語」です。いま教育勅語は表舞台から姿を消されてしまいましたが、ここにはもう一度見直さねばならない大切なことがこめられています。

知人の息子は、警察や保護司にもお世話になるような問題を起こす子供でした。親から相談を受け、この「かみさまのおやくそく」を毎朝父子で読むことを勧めました。やがて三月ほどが経ったとき、その子が目に見えて変わり、その周りの友達まで変わり、なんと地域の方々に信頼を置かれるまでの存在になったのです。

■昭和天皇の行幸

ヤマトの心というのは、自然を感じ自然に学び感謝する心です。すべてのものに命が宿り、すべてが繋がって共生しています。「相生（あいおい）の理」とは、中心確立の心です。日本の中心は天皇陛下です。かつて日本各地に当屋という祈り主を決める制度がありました。当屋は神社にこもり国の安寧と人々の幸福を一年間祈るのが役目です。天皇陛下は大当屋といわれる祈りに特化した方です。

昭和二〇年に終戦を迎え、当時日本は大騒ぎでした。善が悪に変わり、悪が善に変わるような、価値観が無茶苦茶になり、国土も人の心も荒れていました。昭和天皇は、荒れた国土や失われた多くの命を思い、天皇の退位をも考えられましたが、国民が沈んでこのときに、慰め励ます役割は自分ではないか、と思われた。復興の希望を国民に与えなければ、と決意し、昭和二

一年神奈川県を出発し、二九年北海道まで、八年半、距離にして三万三千キロ、全国行幸されたのです。

昭和二十四年の佐賀県のことです。因通寺という寺では戦争孤児を四〇人ほど保護、育成していました。その子らの前で陛下は腰をかがめ、目線を子供たちに合わせて一人一人にお声をかけられました。そうして次の部屋に向かわれるその背に子供が「さようなら！」と言うと、陛下は子供たちのもとに戻られ、一人一人に「さようなら」と言われたそうです。続く病棟では三人の女の子がいました。一人の女の子は二つの位牌を手にしていました。陛下がお尋ねになるとそれは父母の位牌で、父は戦死し、母は引き揚げのときに病死したとのことでした。陛下が「お寂しい？」と聞かれると女の子は「私は仏の子ですから寂しくはありません」。陛下は女の子のやりとりの末に「仏の子は幸せだね」と言われました。陛下の目から涙が落ち、女の子は一言「お父様」と言ったそうです。

これは陛下が役目だからなさったことなのでしょう。これが日本の「シラス」です。「和をもって貴しと為す」とは、みんなで一つであること。昭和天皇様は国民を御宝と、私があなた、あなたが私であるから、あなたの悲しみは私の悲しみ、あなたの喜びは私の喜び、とされたのでしょうか。自分自身が徳を積みながら国民を祈る、日本には国の中心に、そのような方がおられるということをこれからもお伝えし続けたいと思います。

(抄録 中川千都子)



《感動語録集》

◆ 武田数宏先生

「今をいきいき」

*「自他一如」あなたの喜びは私の喜び 徳を積みながら民を祈る

*「祈る生き方」

世界の平和・宗教が一つに・地球の命

*忍びざるの心 困っている人を助けるのはあたり前

*三月〓みつき〓身につく

(寺田先生はよく三つを云われていた。)

*「ヤマトの心」 自然を感じ・学び・感謝する

*幸せは豊かなものの中にあるのではなく、足りないものの中にある

*祈られていることを魂で感じる

*逆らわず、ニツコリ笑って従わず

*天皇の自分自身の徳積みの生き方に、日本人の生き方の原点

*失わないと気づかない幸せについて、命や自然に対するありがたさに感謝し、あたり前の幸せに気づいて生きていく

*「相性の理」

*「忍びざる心」

*日本の心、ヤマト言葉の素晴らしさを教えて頂きました

*今回教えていたことを、次世代に繋げていきたいと思いました。

*自分をさておき、ひとさまに

*いのちをいただくことへの感謝

*左のはき物はお父さん、右のはき物はお母さん、歩く時は別々だけど、休む時はいつも一緒



秋季宿泊研修 於 伊勢修養団

11月13日(土)～14日(日)





《塾生の本棚から》

「私を助けてくれた書籍」

中村隆行

私が紹介するのは、横田南嶺老師が大好きな坂村真民先生の書籍です。

中国に赴任するときに、上司から自筆の一枚の詩とともに詩墨集『念に生きる』を貰いました。この本は、真民先生直筆の独特の書体の書と詩が入っており、先生の気持ちが良く伝わる内容でした。

そして、一枚の詩は、本の中にある「あとから来る人のために」でした。

上司の思いは、「合併会社の体制を整えて、後から赴任する若い人がやりやすいようにしてくれるように」だと感じました。60歳での赴任ですから長くは出来ないのですが、「会社を良くすること」を念頭に置いて頑張りました。しかし、外国での仕事は最初から思うようにはいかないのが常で苦労しました。そうしていると、「念ずれば花開く」の詩を思い出し、正しい思いがなければ、何事も達成することが出来ないと思い、初心に立ち返り仕事をしました。

中国で、この本を何度も読み返すうちに、もう少し坂村真民ワールドを学びたいと思い、『坂村真民一日一語』を購入し、毎朝一詩ずつ読んで書写もしました。

その中で、私が一番気に入っている詩をご紹介します。

「鈍刀を磨く」

鈍刀をいくら磨いても無駄なことだというのが

何もそんなことばに

耳を貸す必要はない

せつせと磨くのだ

刀は光らないかも知れないが

磨く本人が変わってくる

つまり刀がすまぬすまぬと言いながら

磨く本人を

光るものにしてくれるのだ

そこが甚深微妙の世界だ

だからせつせと磨くのだ

これは、私自身のことに感じ、この詩を読み返しながら、中国生活を続けました。帰国前には、中国人とうまく仕事が出来たようになります、今も、時々ですがメールのやり取りをしています。今後、坂村真民ワールドに触れ、生き方について学びたいと思っています。



『人間学塾・中之島』次月日程

【1月日程】

- ◆ 日程 1月8日(土曜) 受付 午後0時〜
- ◆ 会場 大阪市中央公会堂 大会議室(地下一階)
大阪市北区中之島一丁目一―二七
- ◆ 講師 木南一志 先生

「降りてゆく生き方」



1959年 兵庫県生まれ。株式会社新宮運送代表取締役。
『S-MC運動』という、4000日間の無事故無違反を推進する循環型の運動を実施、「事故が起きても仕方がない」という考えを壊し、社員の自発的な努力の必要性を促している。本物と呼ばれるような企業を目指して、柔軟なスタンスで事業を推し進めている。

『推薦書籍』

『人生の合い言葉』

上甲 晃 著

本日販売中 !!



刊行 令和3年8月12日
出版 致知出版社
頒価 1,540円(税込)
ISBN-10 : 4800912565

「青年塾」には、いくつもの『合い言葉』が存在するといいます。「一人占めは、人格三流」「人格は、後ろ姿に現れる」「見方を変えればすべてはチャンス」「困るから出会える」「言われてやるな、気づいてやれ」「非常時も、三日続けば、平常時」他70の秘伝を、一般向けに公開するもの。心に刻み込みたいと願って考えたひと言ひと言である。普段、ふと口を衝いて出てくるような平凡な言葉の中に真理があると信じている」と著者。『合い言葉』が口癖になり、さらには、行動の習慣になつていくことで、人生は好転していくことでしょう。

『わたしのハガキ道』

西田京子

きっかけは天分塾。

坂田先生の複写はがきに出会い、塾生の太田さんに誘われ初参加した「はがき人の集い」も、今では全国を巡り回遊魚と呼ばれています。島さんが始めると聞き、私もやってみようと「一人新聞」を始め、はや10年。紆余曲折を経て今は「一人新聞」と「複写はがき」が中心です。

最近絵手紙にも挑戦。はがきの楽しみ方色々。消印は風景印や初日印(記念切手の発売日のみ中央郵便局で)を依頼。地元は勿論、行った先の各地から発送、自分宛にも。始めた当初は書く宛てがなく、自分に一日一信していた私。集い巡りで、知り合いが増え、一人新聞の発送100通超えたところで限界が。今は返信ある方に、基本1発行、上限は100枚になりました。内容は、新聞や本等、自分の感性に引かれた記事からがほとんど、時々私の日常も。毎日何通と決めず、気分次第で書ける時に書きます。自分も相手も読んで楽しいものをと心がけて。はがき交流してくださる方があればこそですね。感謝しています。でもはがきを溜めがちな私、感謝が足りないと言われそう(笑)。感謝。



『芳信抄』

埼玉県 山下武彦 様

石川真理子先生のご講話抄録、納得の内に読ませて頂きました。鎌倉時代に制定された北条泰時の『御成敗式目』に端を発し、家康や寺子屋の教本として広く伝わっていったとのこと、日本人の生活や心に受け容れられたようですね。

「塾生の本棚から」佐藤一斎『言志四録』は、不屈の名著ですが、誠に言い得て妙ですね。

埼玉県 大出雅一 様

講師の抄録は、今日に通じる大切な教えと気づかせて頂きました。『御成敗式目』は、今日にも生き方の規範を示す指針として生きていることを改めて教えて頂きました。そして「受け容れ認める」「決める」「変える」「忍ぶ」「弱さを知る」ことが「強さ」の具体例として解りやすく示されています。

宮城県 加藤秀夫 様

巻頭の講師抄録、武士道の発生とその変遷を大変解りやすく、日本人の規律・美意識として現代に定着していること、この精神を正しく理解して今日に活かしていくことを認識させて頂きました。

愛媛県 桂 誠司 様

石川真理子先生の武士道の中で「強さ」受入れ、認める、決める、変わる、忍ぶ、弱さを知る、そして「美学」現代の我々にも必要なことですね。

愛知県 坂部智一 様

宮大工西岡常一棟梁の『木のいのち 木のこころ』の中に鎌倉時代の建築様式が素直で独特の美観があつて、美しい日本の感性があると。御成敗式目が生まれた時代の心が表れていると感じました。愛：慈悲があることは強さでもある。真の強さを教えて頂きました。